

□ 2/15 (土) 全体研修

タイトル	痛みや苦しみを抱えている人に向き合おうとする心のあり方 ～ホスピスケアの歴史を振り返り、マインドを忘れないために～
内容	1967年ロンドンにセントクリストファーホスピスが開設され、現代ホスピスが幕を開けた。設立者のシシリー・ソングースは、痛みや苦しみを抱えている人に向き合おうとする心のあり方をケアリングマインドとして示され、ホスピスは世界中に広がっていった。わが国で最初にホスピスケアが実践されたのは、1973年大阪の淀川キリスト教病院においてである。ケアリングマインドは脈々と受け継がれ、現在全国の緩和ケア病棟は500施設を超えている。マインドはホスピス緩和ケアに留まらず、ケアに携わるすべての人が是非とも持ち続けてほしいものである。ホスピスの歴史を振り返りマインドの普遍性、持ち続けることの大切さを共に考えたい。(オカリナ演奏付き)
講師名	三枝 好幸
プロフィール	 <p>1985年福島県立医科大学卒業。学生時代からホスピスケアについて学びを深め、卒後外科医として緩和ケアに携わる。1998年聖ヶ丘病院ホスピス長となり、聖マリアンナ医科大学や東京医科歯科大学などで非常勤講師を併任。2014年現職、桜町病院ホスピス科部長に就任。日本死の臨床研究会代表理事・ありかた特別委員会委員長、日本ホスピス緩和ケア協会理事、日本終末期・緩和ケア音楽療法士連絡会顧問・監事、聖ヨハネホスピスケア研究所所長。</p>

□ 2/16 (日) A会場 《分科会①》

タイトル	多様な発達スタイルの子どもたちの理解と支援 ～感覚統合理論、スヌーズレンの理念に基づく実践～
内容	いわゆる発達障害と呼ばれている子どもたちのなかには、感覚や体の使い方に多様性がみられることがあります。この多様性を理解・尊重し、適切な配慮と発達のサポートを行っていくことで、子どもたちの生き生きとした生活を実現することができると考え、これまで実践してきました。私の実践において大切にしてきた考え方は、感覚統合理論とスヌーズレンの理念です。感覚統合理論は、感覚－運動の多様性によって生じる子どもの行動や運動の困難さを理解することに役立ちます。またスヌーズレンの理念は、発達促進という視点から離れ子どもの多様性を受けとめることで子どもとの関わり合いや楽しさの共有の大切さに気付くことができます。今回の講義では、この2つの視点で、多様性によって生じる行動の理解、支援の方法、さらに多様な発達スタイルの子どもたちの捉え方などについて考える機会をもつとともに、これらの理念をベースとして運営しているプレイジム（児童発達支援・放課後等デイサービス・保育所等訪問支援事業所）での取り組みなどについて紹介させていただきます。（少し体を動かすミニワークも実施する予定です）
講師名	太田 篤志
プロフィール	 <p>学童保育・保育園、重症心身障害児施設での作業療法に従事した後、広島大学医学部・学部内講師、姫路獨協大学医療保健学部・教授などを歴任。感覚統合機能検査の研究開発に携わるとともに、療育センター、小中学校・特別支援学校などの現場にて感覚統合理論やスヌーズレンの考え方に基づく実践を支援。2014年、現在、福祉事業所の運営に携わりながら、子どもにとって意味ある作業（活動）を用いた発達支援、オープンゴールの理念を重視したアニメーション活動の実践、インクルーシブ保育の実現に向けた取り組みを行っている。</p>

□ 2/16 (日) B会場 《分科会②》

タイトル	音楽療法と声—
内容	私たちにとって「声」はどのようなものでしょうか？ 言葉話すことや歌うことの音源であることはもちろん、心身の状態を映し出す鏡であり、同時にアイデンティティにもかかわる非常に大切な存在です。本講演では、発声器官の進化論的起源とそれゆえに人類が負ってしまった課題、呼吸・発声・構音機能の連続的なメカニズム、加齢と発声の関係、パーキンソン病による発声・構音障害、その解決方法のひとつとしての音楽療法プログラム、そして声を使う職業・音楽療法士の声の使い方の特殊性などについて解説し、皆さんと体験していきます。気持ちよく声を出すこと—それはセラピストとその対象となる人たちを幸せにするツールかもしれません。
講師名	羽石 英里
プロフィール	 <p>昭和音楽大学教授。同大学音楽療法研究所所長。日本音楽療法学会認定音楽療法士、アメリカ音楽療法学会認定音楽療法士。東京藝術大学音楽学部楽理科卒業後、国際ロータリー財団の助成にて渡米。カンザス大学大学院にて音楽療法修士号と博士号（Ph.D.）取得。同校で講義・実習を担当。パーキンソン病による発声障害改善のための音楽療法実践および研究を続けるとともに、学際的視点から歌声の研究にも取り組んでいる。</p>

□ 2/16 (日) C会場 《分科会③》

<p>タイトル</p>	<p>「人間と音楽の本質的関わりについて ～重症心身障害児者（医療的ケア児者）の事例から学ぶ～」</p>
<p>内容</p>	<p>高山の重症心身障害児との出会いは20年ほど前に遡る。病院に隣接する某支援学校からの依頼で、中学部の最重度心身障害（＝医療的ケア、学校では重度重複障害）A君との出会いから始まった。A君は1歳の時に自宅の池に落ち、“低酸素脳症”の重い障害を負った。人工呼吸器をつけ、目は見えず耳も聞こえているか不確かな状態であり、手足は動かず、一見、何もできないように見えた。「音楽療法をどのように実践するか」途方にくれた高山は、A君の側で歌うことから始めた。数ヶ月後、「もののけ姫」の曲になると心拍数に変化が出た。その後、この曲を演奏すると涙を流す様子が見られるようになった。この経験から高山は、「音楽することmusicking」の意味を考えるようになり、すべての実践において、人間と音楽の本質的関わりを考察しながら実践してきた。</p> <p>今回の研修では、これらの内容を含め「身体、知力・認知、感情、関係・社会性」の発達の焦点・順序性を確認しながら、参加の皆様とともに「実践映像」から学びたいと考えている。そして、この作業は音楽療法の原点的学びであり、特に、自閉症や高齢者の領域にも大いに関連した学びとなる。</p>
<p>講師名</p>	<p>高山 仁</p>
<p>プロフィール</p>	<div data-bbox="325 1164 676 1694" data-label="Image"> </div> <p>たかやま音楽療法研究所主宰 日本音楽療法学会代議員 認定音楽療法士 国立音楽大学音楽学部声楽学科卒業、宮城教育大学大学院教育研究科障害児教育専修修了、教育学修士。卒業後（株）河合楽器製作所教育部に勤務、専門講師、指導主事を務め1996年一身上の理由により退社、音楽療法士の道を志す。（一社）日本音楽療法学会代議員・理事・常任理事を歴任し、2020年度まで講習会委員長として音楽療法士の育成にあたる。現在、たかやま音楽療法研究所主宰、宮城県立支援学校外部専門講師、仙台つるがや福祉会：ゆう貝ヶ森非常勤講師、日本音楽療法学会東北支部長として、音楽療法全般、幼児・児童領域の音楽療法実践研究、また音楽療法の発展のため講演・研修などに日々励み、2026年度当学会学術大会（仙台）の企画準備にあたっている。所属学会：日本音楽療法学会、日本音楽教育学会。著作：「みんなで音楽」音楽之友社、2011 他</p>